# 郷土室だより

第121号
平成17年2月15日
編集・発行
中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地1-1-1
電 話 3543－9025
刊行物登録番号 16-042


## 「続」中央区の"橋"（その21）

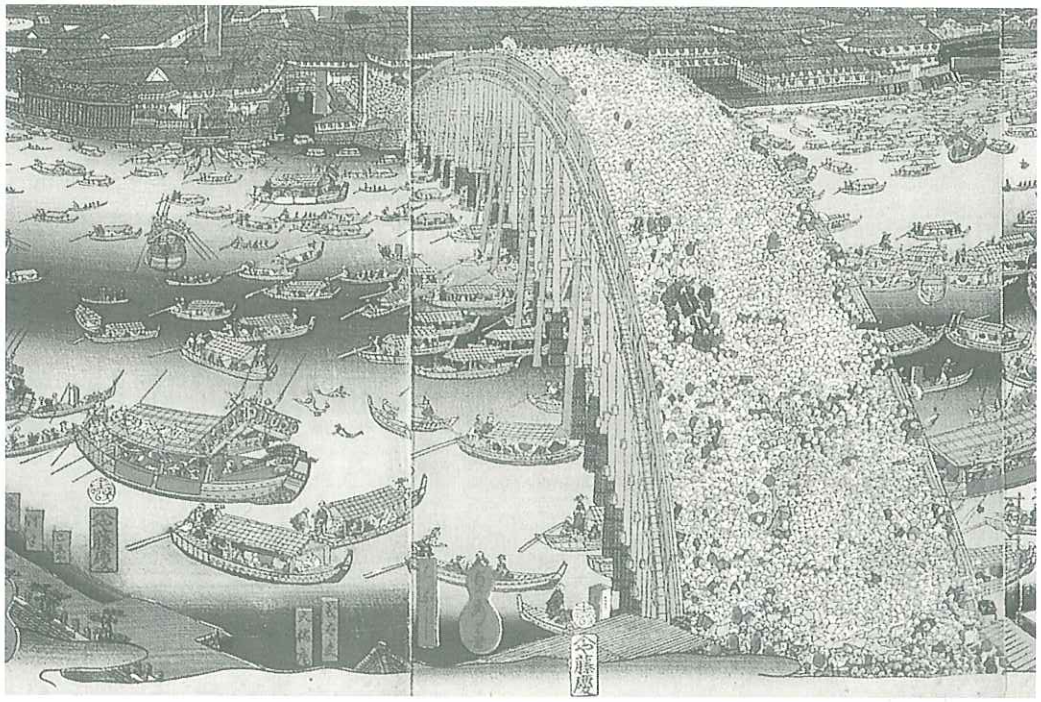
### ◇長すぎました

この"橋"シリーズは平成七年十二月発行の（その1）に始まり、この号（「続」その21）まで、歳月にして足掛け十年、郷土室だよりの号数では九〇号からこの号一二一号まで、ちょうど三〇回の連載になりました。これは次ぎに述べる経過に比べて非常に長く続いたものといえます。

京橋図書館郷土資料室（現在の地域資料室）の活動の一つとして、この「郷土室だより」の刊行があるのですが、その役割は地域資料室が集めた資料を中心に置いて、利用者の皆さまにより多角的にその資料をご覧いただきたいために、ささやかながら利用のヒントになるような話題・資料の紹介・解説を提供することを目標にしています。

それゆえに一つのテーマにこだわって、あまり長く続けることは不適当だという考えもありまして、この号でひとまず「橋」についての記述は止めることにしました。

振りかえってみますと、私がこの「郷土室だより」に執筆し始めたのは平成二年七



五雲亭貞秀「東都両国ばし夏景色」（安政六年。3枚続の左2枚）

月刊の六八号からでした。それまでは尊敬していた安藤菊二先生が、創刊以来ご執筆されていたのですがご病気の為、私が起用されたのです。実はその当時私は『中央区沿革図集』の執筆・編集を依嘱された時期でしたので、図書館側では丁度よかったという事情もあったようです。

**海・みち・橋**　以後、本務の『中央区沿革図集』の仕事と平行して、まず「中央区の海岸線シリーズ」（六八号～七五号の七回）で、江戸開府以前からの中央区の範囲の「原形」を確認する事から始まりました。つまり未開発だったこの範囲に、どのような陸と海が分布をしていたかという関心によるものでした。これは本務と密接に関連した作業でもありました。

続いて「中央区の〝みち〟シリーズ」（七六号～八九号の十一回）を書き続けました。わざわざ〝みち〟と平仮名で表題をつけたのは、一口に〔道路・橋梁〕と括られる土木工事の結果としての構造物ではなく、人間生活に深く関わっていた道路のあり方に重点を置いたものです。

江戸時代には江戸に限らずすべての都市の町割（都市計画＝公有地と私有地の関係の法則）は、道路を中心にして実施されたこと。そして町は現在でいう「公法人」であり、町民はその自治的運営に責任を持っていたこと。その反面には強い規格性があって都市生活とその行政上、もっとも能率的な施設であったことなどを中心に、公的な〝みち〟と私有地との間に必ず設けられていた庇地（ひさしち）と下水との関係などの資料をまとめました。

つまり、道路というものを「輪切り」にして、その断面を観察したものといえます。

なおこのシリーズは全体を書きなおして『江戸のみちはアーケード』（青蛙房・平成九年刊）として出版されました）。

**◇橋シリーズ**

その後も「郷土室だより」への執筆は続き、九〇号から九九号まで九回（平成七年十二月～平成十年三月）、「中央区の〝橋〟」を書いて一旦中断しました。ところが約半年後の九月からまた執筆を継続することとなり、以後、現在まで（「続」中央区の〝橋〟（その21）、通算しますと今号で「橋シリーズ」は三〇回続いてきたものです。

この場合も、「原形」を明らかにすることに重点を置き続けました。「天の浮橋」（九七号）でも述べたことなのですが、「はし」は「端」でもあり、「端」と「端」とを結ぶものが「橋」であります。自然的な障害、社会的な障害をはねのけてそれぞれ異なる「世界」を結ぶ手段の一つが「橋」だと考えた上で、このシリーズを始めました。

そのために始めは「両国橋」について、三回にわたって述べたのは、「中央区の橋」は中央区内の橋に限らないということ、つまり橋には「対岸」があることを強調したものでした。

こんな調子で三〇回におよぶこのシリーズのすべてについて、改めてその概要を詳しく説明することは「屋上　屋を重ねる」ことでもありますが、私としたならば、これまでの「橋」に関係する多くの文献・資料の中から、使用された資材の性格やどのような工事方法で建設されたかといった角度から、いろいろな解明を続けてきたことを強調したいと思います。

その反面「文学的」角度や、名所旧跡案内といった要素はこのシリーズでは出来るだけ排除して、新しい角度から「橋」を見続けてきました。こうした経過を述べることがこれまでの整理と今後の展望を得るために、あながち無駄なことではないと考えているからです。以下に各号の項目索引と執筆者の反省を込めた一覧を造りました。

**◇橋シリーズ一覧**

（〔　〕内はその号のおおよその内容を示します）

**九〇号（その1）〔真田信利（さなだのぶとし）という殿様〕**

両国橋／いつ完成したのか？／仮橋と木橋／橋の被害と復旧／改架工事のうちわけ／木材が来なかった！／町人との約束／仮橋十五年

**九二号（その2）〔上州と江戸の交通〕**

沼田からの手紙／信利という大名／上州の巨木／沼田への旅／名所江戸百景／「江戸百」の中の橋

九三号（その3）〔橋材と瀬替え〕
橋の修理／用材の質と寸法〔末口と元口〕／千住大橋のこと／天下普請の橋／荒川の瀬替え／入間川と荒川／檜から槇へ

九四号（その4）〔京橋地区の町名の一貫性〕
汐入り川／両国橋架直記録／槇か槻か／本材木町舟入堀の埋め立て／槇づくし／槇の意味／槇町／現在の「槇町」

九五号（その5）〔深川の発展・新大橋と永代橋〕
素材としての槇／鹿児島の槇／やまとふみの投書／深川大橋から新大橋／レインボーブリッジ／芭蕉と新大橋／五十賀の橋／あまり木余聞

九六号（その6）〔町人管理橋〕
その後の永代橋／屋敷と身分制度／幕府のリストラ／廃止予定だった永代橋／やはり材質か／橋銭訴訟／橋銭・掛直し・掛継／夢の浮橋／三橋会所／江戸時代の橋の技術

九七号（その7）〔橋杭の立て方〕
天の浮橋／『山崎架橋図』／橋杭は打ち込みか／組み立て式橋脚／集積「材」の技術／目黒の太鼓橋／橋の大敵／震ぎどめ／綱と縄

九八号（その8）〔千住大橋と吾妻橋の心中・続橋杭の立て方〕
女性の野次馬／船の衝突／十六艘の船の内わけ／事故の後始末／岡崎・矢作橋／震り込み人足の唄／打ち込みから震り込みへ

九九号（その9）〔続・続橋杭の立て方〕
続モンケン／N値も同じ／震り込み復活／ばい尻／いまの震り込み／一橋脚は「一側」／両国橋の橋脚／風景画と実際／震り込み深度／日本橋四百年

一〇一号（「続」その1、通算一〇号）〔橋の下には水がある〕
再開によせて／橋は年表／大川四橋／深川開発／その他の川／江戸城と川／臨海都市「江戸」／江戸の水路の特徴／徳川以前の橋

一〇二号（「続」その2、通算一一号）〔中世の橋・江戸の高橋〕
『江亭記』の中の橋／江戸の高橋の位置／『東京地質図』／江戸の高橋／高橋の理由／「清明上河図」

一〇三号（「続」その3、通算一二号）〔江戸の堀川〕
架橋八八周年／二つの日本橋／『慶長見聞集』の日本橋／要約と問題点／橋はいつ架けられたか／慶長八年という年／堀川の意味／真相が分かる資料

一〇四号（「続」その4、通算一三号）〔江戸の水辺の原形〕
タイトルの話／『見聞集』の見聞／銭瓶橋／たな橋と天竺橋／道三堀の出入り口／日本橋はいつ出来た

一〇五号（「続」その5、通算一四号）〔人工河川日本橋川〕
川の両岸／五つの条件の検討／日本橋の井戸／日本橋川の断面／土木工事の特徴

一〇六号（「続」その6、通算一五号）〔東京の石造アーチ橋〕
城の東側の外堀／鍛冶橋人／石造アーチ橋／アーチの下の映画館／「肥後の石工」／江戸の太鼓橋／鉄橋弾正橋

一〇七号（「続」その7、通算一六号）〔取捨選択の時代〕
眼鏡橋の普及／近代化の足取り／「明治初期の橋梁年表」／「博愛的拠出」／「眼鏡橋」の盛衰／景観設計の犠牲

一〇八号（「続」その8、通算一七号）〔金物泥棒とメンテナンス〕
橋の維持管理／贓物の話／橋と「御触」（町触）／貴重な「古かね」／橋の鉄物／繰り返す禁令／昔も今も

一〇九号（「続」その9、通算一八号）〔金物献納とその被害者たち〕
見ないことには／金属不足始まる／本格的戦争の前に／金属回収の実態／空かん回収／当時の用語について／五七年前の遺跡／なぜ「意識」なのか／中央区近代橋梁調査

一一〇号（「続」その10、通算一九号）〔昭和五年当時の区内の川と橋〕
早すぎた『海国兵談』／水の上の境／日本橋区・京橋区の河川名／もう一つの荒川支川／埋められた外濠／映画『パール・ハーバー』／外濠の役割

一一一号（「続」その11、通算二〇号）〔掘ったり埋めたり都市の川〕
「江戸前島」に掘られた川／洪積地が選ばれた／外濠は平川のバイパス／横断運河紅葉川／紅葉川の橋／紅葉川の埋め立て／楓川とそ

の橋

一一二号（「続」その12、通算二一号）〔湊町だった京橋地区〕

横断運河十一本／日本橋二丁目遺跡／舟入堀計画／巨石の必要性／港湾施設と輸送路と／家康の許しで実現／石綱船と修羅／その後の町の移動

一一三号（「続」その13、通算二二号）〔公表された疲労亀裂〕

橋の形相／道路の橋脚／橋と道路／モノの寿命／京橋川と京橋／銀座の意味／銀座の匂い／初期の「銀座地区」の範囲

一一四号（「続」その14、通算二三号）〔埋立地ではない場所・銀座〕

「銀座地区」の周囲／芝口御門／再出三十間堀／「銀座」東側の埋立地／意外な河岸の広さ

一一五号（「続」その15、通算二四号）〔職人の町木挽町〕

開府四百年／三十間堀川の東岸／木挽町／木挽きの風景／消えた木挽きたち／三十間堀川の橋

一一六号（「続」その16、通算二五号）〔杭上都市の成立・江戸名所図屏風での比較〕

橋と端／劇場街木挽町／地点の確認／地図との比較／木挽町の地価／江戸劇場街成立地

一一七号（「続」その17、通算二六号）〔水ぎわの盛り場〕

江戸劇場街の実態／杭上家屋／「傾く」／「厳有院殿御実紀」／劇場街の水道／〔追記〕

一一八号（「続」その18、通算二七号）〔戦前の外濠埋立計画・八重洲口の誕生〕

君の名は／外濠埋め立て／未見の資料／資料の説明／発行時点の推定／数寄屋橋附近整理完成後の鳥瞰図

○一一八号追記

この号の資料『河濠整理計画』を下さった鈴木浩之先生は、平成十六年七月一日に、中央区社会教育課主催の「区民講座」の講師として、御自身がカヌーを漕ぎながら、現在の東京の町を川の上から見た風景をビデオに記録された作品をもとに、お話をされて好評でした。

一一九号（「続」その19、通算二八号）〔橋の大きさ〕

小さな橋／新田橋／弾正橋／八幡橋（国指定重要文化財）江東区富岡一丁目二番七号／第二編の表と解説記事／中央区最狭の松幡橋／楓川の橋／橋の寸法などの違い

一二〇号（「続」その20、通算二九号）〔水辺の近代化〕

昔の橋の実際／三ッ橋のはなし／古記録への疑問／数えたり「一厘」／船と水路の近代化／帝都復興事業の意味／三ッ橋の変化／江東地区の三ッ橋

## ◇橋の資料

地域資料室の資料の中には橋についての文献・写真・地図などがかなりの点数が有ります。もちろん中央区内の橋に限らず広範囲の地域の橋の資料も含まれています。区内の橋に付いて手軽に調べる場合には『中央区の文化財（三）・橋梁（中央区橋梁一覧図付き）』（中央区教育委員会編・昭和五十二年刊）、このほかに『中央区の地盤－地盤と地震の話－』（中央区都市整備部建築課構造係編・平成五年刊）によって、区内の河川の成立事情がわかりますし、さらに橋梁工学的なデータ集でもある「中央区文化財調査報告書　第五集『中央区の橋・橋詰広場』中央区近代橋梁調査・一九九八年・中央区教育委員会刊」などがあります。

また戦前発行の『日本橋区史』・『京橋区史』、戦後に発行された『中央区史』および『中央区三十年史』の各巻における「橋梁」の部を御覧になると、執筆当時の時代を反映させて微妙な違いが発見できますし、資料の見方も変わっていることも分かります。このような作業が一つの図書館で可能なのは、京橋図書館地域資料室の資料が長い間かかって、蓄積されたものであることを物語っています。このような〔図書館のかたち〕は今となっては「日本の図書館」の中ではかなり珍しい存在である事を《特筆大書》して置きたいと思います。

（鈴木理生）